

国際障害者年記念作文

二上達彦君、小金山貴弘君が見事優秀賞に

国際障害者年の記念事業として、昨年、栃木県が募集した「国際障害者年記念作文論文」には、小学生七十四校三百七十七点、中学生二十六校百五十七点、高校生二十校六十三点、また、一般からは二十七の市町村から七十一の作品が寄せられました。

この中から、小学生の部で二上達彦君（日光小六年）現在東中一年の作品が、また、中学生の部で小金山貴弘君（中宮祠中三年）現在宇都宮高の作品がそれぞれ優秀賞に選ばれました。ここに、両君の作品を紹介し、これらの作文が、障害をもつ人たちの正しい理解と今後の実践に役立ち、また障害をもつ人自身の努力への励みとなれば幸いです。

あきらめないぞ

日光小六年 二上達彦

ぼくは、自分の将来のことが一番心配です。両親もいっしょけんめいに考えてくれますが、なかなかよい考えが浮かびません。

「達彦は大きくなったら何になりたいの。」と母にきかれて、ぼくはまっ先に、「バスかタクシーの運転手。」

と答えました。ぼくは今、交通のことに興味があり、のりものや駅のことについているので、そんな仕事ができたらいいなと思っていました。

「おまえは目が不自由だから、無理だろう。」母はさびしそうにわらって言いました。

「じゃあ、ほかは何ができるかなあ。パトカーのおまわりさん。アナウンサー。ぼくは計算が得意だからお店のレジなんかどうかな。学校の先生もいいな。運転手がだめなら駅の切符うりでもいい。」

「そうねえ、あれは、手先もきょうで力が入らないと……。」と心配そうです。ぼくは何だか心細くなりました。どうしてぼくばかり、こんなにやれないことがたくさんあるのだろう。ぼくだって、友達ちみんなど同じように、やってみたいものがいっぱいあるのに。

ぼくは生まれつき目が悪く、赤ちゃんのころは体も弱くて、母はぼくをおぶって病院ばかり歩いたそうです。独協医大で目の手術も受けましたが、視力はよくならず、両方の目で見られるようにはなりません。これ以上なおすことはできません。あとは訓練するほかにないでしょう。と医者に言われた時、両親はがっかりして力がぬけてしまったそうです。

保育所に入ってから、ぼくは目が不自由な上に手や足も思うように動かず、よく転んだり、物にぶつかってめがねをわったり、けがをしたり、あぶないことがたくさんあって、母は苦労がたえなかつたそうです。よく友だちにいじめられて泣いているぼくを、母はいつもかばってくれました。